

ならないなどといっているのは、意味が不明になってからの附会で、やはり会津地方で伝える、神のお通りになる門になぞらえたもので、冬に山に帰って山の神になっておられたのが、春になって田の神、即ち農神として下ってきて、農作を見護りなされ、秋に一切の田の行事を無事果されて、山の神になってお帰りになるという意味であることがわかってきている。山の神と田の神は同じもので、季節により山を下りられるというところは、磐梯明神が山の神で、本寺の磐梯明神、ここは永く恵日寺下にあったが、ここに古くお田植の神事があったことなどで、会津地方にも、これを裏付ける名残が、うかがわれないことはない。明神岳が山の神で、高田の伊佐須美神社の御田植祭が田の神祭であろうと思われるが、もともとは同じ神であったかと思う。

豊年予祝をして、秋に収穫を終ると、必ず感謝の祭をすることを忘れなかった。

田植が終った時のまぐわあらいには、てないと餅を馬鍬、えんぶりに捧げる。高田伊佐須美神社は産土神様で七月十二日がさなぶりのお田植祭、つぎの日がこさなぶり、田植が地方としても無事終って、田の神がお帰りになる、さのぼりである。さは田の神の意であろう。

虫送り、風祭り、雷神様のお祭にはお日待ちをして豊年の祈願をするので、感謝ではないが、早秋の豊年踊り盆踊りなどには、豊年の見通しのついた喜びと感謝がこめられている。稲を刈上げると、刈上げ餅を掲ぐ。十月十日頃に虫供養などをやる村もあったが、農薬で大量に殺すようになっては、虫供養などという、憐憫な気持が湧くかどうか。十一月一日を特に刈上げ朔日などといっている村もある。

籾の脱穀調整が終ったときのいなごばたきは、村によってはむしろばたきなどともいっているが、これは現在も殆どの家で、かいもち、おはぎなどをつくって、稲作作業の最後の行事として感謝をこめて行なっている。

この頃に恵日寺から大頭・小頭が廻ってくるが、いなばちは、稲の初穂で、稲二束を、豊年を感謝して、田の